４　次の文章は、「がぜぼ谷」という地名の由緒を知ろうと、入道を久しぶりに訪ねたが、武士についての話を聞く場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

　　〈千葉大〉二〇二〇年度出題

　陶々子云ふ。「の事かねて聞き及びたり。武士には武士といふ習ひ侍るよし承りたし」と云ふ。得船が曰く、「Ａ武士といふは武のみ心に備へたるを云ふ。たとへばにを合はせ、や矢の根に少しのをも付けず、馬具をきれいに嗜み、早縄、、腰差、弁当、、鎌までも懸けならべ置くやうなる事にてはあらず。これは、嗜みといふものにて候ふと。又道具好きとも申し候ふ。町人にも刀脇差をきれいにへ、少しの錆をも付けず、寝刃を合はせ差し申し候ふ者、多く腕だてをいたし強みを申す。今時の町人抱へなど申す者を、武士とは申されまじく候ふ。たとへよき武士にても、手前ならず勝手不如意なれば、錆身の刀脇差を差すことも候ふ。さありとて、この人をにてはなきとは云はれまじく候ふ。士の意地の強き者は、生れ付きてを云ひ貪る事を致し候はぬ故、人の気にも入らず。それゆゑ立身も成りかね、手前もならぬ事多く候ふ。今時はそれをたはけ者、不調法者と名付け候へば、評判格別の世にて、さてこそすたりたると申し候ふ。

　①武士の道、教へありといふは、遠き事にはあらず候ふ。眼前にて近き事にて候へども、心に修行なく常住心に懸けざる人は、その品を聞きても合点まゐらず。浅き事に存ずａべく候へば、かへりてそしりを受くるにてあるｂべく候ふ。貴殿は俳諧を致され候ふ由、かねて聞き及び候ふまま、俳諧の心にて申すべく候ふ。この頃京の町人②季吟と申す者、『』と申す書物を作り出だし候ふ。それに有心の句作り、無心の句作りといふ事候ふ。その句は、

　　月をめて猿やほしがる

　　詠めて月を猿やほしがる

かくのごとく候ふ。この句文字の違ひなく候へども、その道を心懸けたる人は有心、無心の句作り、合点参るべく候ふ。俳諧知らぬ人は、合点あるまじく候ふ。武士の教へもかくのごとくにて候ふ。刀脇差は百姓町人も差し申し候ふ。、も人をば切り申し候ふ。弓、鉄砲、鑓、兵法、馬を乗り申す者も、それぞれの芸者あり。武士といふ名はなし。書物読む智ある者は、もつとも儒者、出家にあり。力を持ち手足頑丈なる者は、取りにもあり。主君より大分の知行を下され、武士といふ名をば、何故に云ふぞといふ事を思ひ、明けても暮れても心の致し、寒きことにもれ、暑き思ひをもいたし、くたびれて術なき目にも会ひ、あるいはア人のいぶせがる所へ忍びて行きて見、野山の人遠き所、又は、などへも夜行きて、その時の我が心はいかやうにありしと試してみるｃべし。  
③畳の上の料簡とは、格別違ふべきなり。されば成り易き事と成りにくき事も少々合点行くｄべし。イ物すごき所の夜道をして、心を試さば愚かなる人の目に見ゆる者は見えずして、行く通りの人の、怪しき怪しくなきもきらりと見えべし。かやうに心をひたと試して、我が心に心を付けて落としつけ馴れたらば、たとへ今戦場に出で、知らぬ物まへなりとも、慌てぬ心あるべし。④慌つるといふは、生まれ付きのの中に、馴るると馴れぬとのわけあるべし」と語る。この物語、がぜぼ谷の事にいらざる事なれども、得船が形見と思ひ書き載するなり。

（戸田茂睡『紫の一本』による）

（注）　○寝刃を合はせ―刀剣を研いで切れ味を鋭くすること。

○辻番―江戸市中の辻に設けられた、街路警護のための番所。また、これに勤務する者。

○町人抱ヘ―町人に雇われた者のこと。

○手前―生計、暮らし向きなどの経済状況。

○勝手不如意―生計が意のままにならず、貧しさに苦しむこと。

○有心の句作り、無心の句作り―ここでは、趣向を凝らした技巧的な句を作ることと、目立たない平淡な句を作ること。

○足軽、中間―武家に仕え、普段は雑務を行う者。

○日用取り―日雇いで、多く力仕事に従事する者。

○卵塔、三昧原―墓所、火葬場。

○物まヘ―戦が始まる間際。

問１　二重傍線部ａ～ｄの「べし（べく）」のうち、意味が異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問２　傍線部①「武士の道、教へありといふは、遠き事にはあらず候ふ」について、「遠き事にはあらず候ふ」とは、どのようなことを言っているのか、説明せよ。

問３　傍線部②「季吟」とは、近世の歌人・俳諧師・古典学者で、『源氏物語湖月抄』の作者でもある人物である。この人物の姓を漢字で答えよ。

問４　波線部ア「人のいぶせがる所」、イ「物すごき」を、それぞれ現代語訳せよ。

問５　傍線部③「畳の上の料簡」とはどのようなことか、わかりやすく説明せよ。

問６　傍線部④「慌つるといふは、生まれ付きの剛臆の中に、馴るると馴れぬとのわけあるべし」を、適宜ことばを補って現代語訳せよ。

◎問７　二重傍線部Ａ「武士といふは武の嗜み心に備へたるを云ふ」とはどういうことか、本文全体の内容をふまえて説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ｃ

問２　Ａ日頃の心がけは必要だが、Ｂ日常からかけ離れた所にあるものではないということ。

Ａ＝３〔「心がける」という内容があれば可。〕

Ｂ＝７〔「身近な所にあるものである」なども可。〕

問３　北村

問４　ア＝人がＡうっとうしいＢように思う所

Ａ＝８〔「いとわしい」「不快だ」「嫌だ」なども可。〕

Ｂ＝２〔「～がる」のままは減点１。〕

　　　イ＝ＡなんとなくＢ恐ろしい

Ａ＝２〔「物～」のままは減点１。〕

Ｂ＝８〔「気味の悪い」「ぞっとするほど寂しい」なども可。〕

問５　Ａ実際に体験して得た考えではなく、Ｂ頭の中だけで考えたこと。

Ａ＝３〔「実際の体験」「実践」という内容がない場合は不可。〕

Ｂ＝７〔「頭の中」「理屈」だけという内容が明らかでない場合は不可。〕

問６　Ａ思いがけない困難な状況に遭遇した時に慌てるということは、Ｂ生まれつきの性質として剛勇と臆病との違いがある中に、Ｃ状況に馴れていることと馴れていないこととの経験の差もあるに違いない。

Ａ＝３〔「困難な状況」といった内容の補いがなければ減点２。〕

Ｂ＝４〔「剛臆」を「剛勇と臆病」の意味で解釈できていない場合は不可。〕

Ｃ＝３〔「べし」は「～だろう」「～はずだ」などの訳でも可。〕

問７　武士というのはＡ武具の是非によって認められるのではなく、Ｂ日頃から心の中で武士とはどうあるべきかを考えつつ、Ｃいろいろ困難な経験を積んでどんな状況でも慌てることのない用意を心に備えている者をいう、ということ。

Ｃの内容に触れていなければ全体０。

Ａ＝３〔「武具」などの「〝物〟は無関係」という内容でなければ不可。〕

Ｂ＝３〔「武士」について「〝心〟で考える」という内容でなければ不可。〕

Ｃ＝４〔「困難な経験」によって「慌てない」という「心構え」を持つという内容でなければ不可。〕

【現代語訳】

　陶々子が言う。「そのようなことは以前から聞き及んでいる。武士には武士という（ありように応じた）慣習があるということをお伺いしたい」と言う。得船が言うことには、「武士という者は武の用意を心に備えている者のことをいう。たとえば刀や脇差を研いで切れ味を鋭くし、鑓や矢の先に少しの錆をも付けず、鎧や馬具をきれいに用意し、早縄、松明、腰差、弁当、鉈、鎌までも掛け並べて置くようなことではない。これは、辻番の心得というものですと（いうことであった）。（さらに得船は）また道具好きとも申します。町人にも刀や脇差をきれいに飾り立て、少しの錆も付けず、切れ味がよくなるように研いで差し申し上げております者は、多くは自分の腕前を自慢して（自分が）強いことを申します。当世の町人に雇われている者を、武士と申すことはできそうもありません。たとえよい武士であっても、暮らし向きが悪く貧しさに苦しむということであると、錆の付いた刀脇差を差すこともあります。そうだからといって、この人を侍ではないとは言うことはできそうもありません。侍の意地が強い者は、生まれついて噓を言い利益を貪ることをしませんので、人の機嫌をとることもない。そのために立身出世もできかね、暮らし向きも悪いことが多くございます。近頃はそれを愚か者、手際の悪い者と名付けておりますので、評判が格別（に大切）な世の中で、そうして（名誉や面目が）失われてしまったと申し上げております。

　武士の道には、教えがあるというのは、遠いことではありません。目の前での間近いことでございますが、心の中で修行することなく普段心に懸けない人は、その趣を聞いても納得なさらない。浅薄なことに思うでしょうから、かえって非難を受けることでありましょう。あなたは俳諧をなさるということを、以前から聞き及んでおりますので、俳諧の心として申し上げましょう。最近京の町人の季吟と申す者が、『埋木』と申します書物を著し出版しました。その中に有心の句、無心の句作りという事があります。その句は、

　　　月を詠めて…（月をじっと眺めて猿が欲しがるのだろうか。）

　　　詠めて月を…（じっと眺めて月を猿が欲しがるのだろうか。）

このようであります。この（二つの）句は文字の違いはありませんが、その（＝俳諧の）道を心がけている人は有心、無心の句作りを、納得なさるはずでございます。俳諧を知らない人は、納得できないでしょう。武士の教えもこのようでございます。刀や脇差は百姓や町人も差し申しております。足軽や、中間も人を斬り申しております。弓、鉄砲、鑓、兵法、馬に乗り申し上げる者も、それぞれの達者がいる。（しかし、その者たちには）武士という名目はない。書物を読む智恵がある者は、とりわけ儒者や、僧侶に（多く）いる。力持ちで手足が頑丈な者は、日雇いで働く者にもいる。主君からたくさんの領地を与えられ、武士という名前を、何の理由で言うのかということを思い、明けても暮れても心の中で細かい点まで知ろうとし、寒いことにも馴れ、暑い思いをもし、くたびれてどうしようもない目にもあい、あるいは問４ア人がうっとうしいように思う所へ人目を避けて行って見、野山の人けのない所、または墓所、火葬場などへも夜に行って、その時の自分の心はどのようであったかと試してみなさい。畳の上での考えとは、とりわけ違うはずである。そうすればなりやすいこととなりにくいこと（の違い）も少し納得するだろう。問４イなんとなく恐ろしい所の夜道によって、心を試したならば愚かな人の目に見える者は見えなくて、行き来する人の、怪しいのと怪しくないの（との違い）もはっきりと見えるだろう。このように心をひたすら試して、自分の心に心を付けて落ち着かせ（そのことに）馴れたならば、たとえ今戦場に出て、知らない戦が始まる間際であっても、慌てない心があるだろう。問６慌てるということは、生まれつきの（性質として）剛勇と臆病（との違い）がある中に、（状況に）馴れている（こと）と馴れていない（こと）との（経験の）差もあるに違いない」と語る。この話は、がぜぼ谷のことには必要がないことだけれども、得船の形見と思って書き載せておくのである。